

華国鋒の文革理論再構築に関する研究

小出 瞬

一九七四年末、時の中国共産党主席・毛沢東は社会主義理論を研究するよう「四人組」(江青・張春橋・姚文元・王洪文の四人を指す呼称)に命じ、一九六六年来の文化大革命は共産主義が到来するまで決して終結させてはならないという文革理論を構築していた。しかし、史実が物語るように、毛沢東の死去(一九七六年九月)と「四人組」の逮捕(同年十月)を経た一九七七年八月の中国共産党第十一回全国代表大会において、新たな党主席・華国鋒は文革の終結を宣言した。

実のところ、毛沢東存命中の華国鋒は毛沢東の文革理論を完全に受け入れていたものの、毛沢東死去後の華国鋒はその文革理論を再構築していたのである。そこで、本稿は、華国鋒が中国共産党と中華人民共和国を代表して行った、毛沢東の死去と「四人組」の逮捕に前後する二つの講話を詳細に読解することを通じて、文革理論再構築の内容と再構築発生の理由を解明する。

毛沢東死去後の華国鋒は、生前の毛沢東が関心を寄せていた文革と社会主義制度(商品制度、貨幣による交換、労働に応じた分配)の関係を不問に付し、文革実践を思想・認識上の程度の問題へと置き換え、文革を直ちに終結可能なものへと再構築した。華国鋒が文革理論を再構築したのは、二つの理由があった。一つは、毛沢東の文革理論が激烈な路線闘争を惹起してきたからであり、もう一つは、「四人組」逮捕後の時代に党と大衆が一致団結しなければならないと認識していたからであった。

そして、本稿は最後に、毛沢東の権勢を継承する必要があった華国鋒は、文革理論再構築を秘密裏に成し遂げるほかなかった、ということを明らかにした。本稿が明らかにした文革理論再構築をめぐる華国鋒の歴史的役割は、文革期からポスト文革期への転換期における中国共産党の独自の理論発展を指摘した点において意義を有している。